

## 聖藩文庫本『豆相記』に於ける「矣」字の用法について

橋村 勝明

### 一、はじめに

『豆相記』は、北条早雲に始まり豊臣秀吉によって滅ぼされる北条氏直までを描いた、所謂後北条に関わる軍記物語である。本文の成立は近世初期とされ、訓点付きの漢字文で記されている。<sup>①</sup> 作者については、『群書解題』によれば不明としながらも「綱成の孫で、北条氏が滅亡してから、徳川家康の家臣となった氏勝の関係者によって書かれたものではないか」としている。中世に『平家物語』『曾我物語』等の真名軍記が成立してゆく中で、戦国の動乱期を経て近世初期に成立した真名軍記が、第二義的変体漢文として如何なる性格を有するのかということについて検討をするために、本資料を取り上げる。分析の視点は、何れの真名本にもある程度の用例を確認することが出来、比較することが出来る助字を取り上げることとする。本稿では特に、『豆相記』に於いて多数用例が確認出来た「矣」

字について検討する。

「矣」字は、先行研究において指摘されているように、<sup>②</sup> 正格漢文では語気詞としての用法を持つとされ、世尊寺本『字鏡』に於いても「語已助辞也」「已矣語詞也」としている。<sup>③</sup> 変体漢文に於ける用法については鈴木恵氏に詳しく、氏は『日本霊異記』のみならず、平安鎌倉時代の変体漢文について詳細に用例について検討した上で、左のように指摘されている。

この様相（橋村注・原態に近い興福寺本では「矣」とする箇所を、来迎院本・真福寺本・前田家本・国会本で「也」字としていること）は、先述の和化漢文用字史上の検討の結果と歩を一にしていると考えられ、従って、ここに日本霊異記古写本間の異動、「也」、「矣」両字の方向として、和化漢文用字上に位置づけられるのである。（二七三頁上）

単純に用例数のみを示すと、『豆相記』に於ける「矣」の用例数

は87例指摘出来る。一方で「也」字は48例存し、「矣」字から「也」字へと用字史上変化を遂げたとする方向性からは明らかに反しているように見受けられる。勿論、平安鎌倉時代と江戸時代初期という、大きな時代上の違いがあり、又同じ漢字文とはいえ、成立事情の違いなども考慮に入れなければならないので、単純な比較などは出来ない。<sup>(6)</sup>そこで、まず『豆相記』に於ける「矣」字の用法を確認した上で、中世以降の漢字文との比較検討を行いたい。

なお、『豆相記』については聖藩文庫本の他、群書類従本についても「矣」字の用例について確認をしたが、群書類従本には89例存し、異同が3箇所認められる。<sup>(7)</sup>

- a 猶「カワフム蟬カ遮レ車精衛填レ海難ヲ遂レ防戦シテ而退ニ于城ニ」  
(聖・一〇オ9)
- a' 猶「カワフム蟬カ遮レ車精衛填レ海難ヲ遂レ防戦シテ矣退ニ于城ニ」  
(群・六下16)
- b 忍「シ鞭市刑ヲ而欲レ拔ト於意恨ヲ自鎌倉ヲ歸リテ武而畔リ矣」  
(聖・一〇ウ10)
- b' 忍「シ鞭市刑ヲ而欲レ拔ト於意恨ヲ自鎌倉ヲ歸リテ武而畔リ乎」  
(群・七上10)
- c 甘縄城守上総介綱成梶原備前守關艦ヲ五百餘艘ヲ而到リテ于三保崎ニ」  
(聖・一四オ9)
- c' 甘縄城守上総介綱成梶原備前守關艦ヲ五百餘艘ヲ而到リテ矣三保崎ニ」

(群・九上11)

右の3例は、何れも助辞の交替例である。聖藩文庫本と群書類従本とはこれらの異同があるものの、用例について検討したところ群書類従本についても本稿の論旨には影響がない。諸本レベルの問題ではなく『豆相記』の用字に関わる問題であると考えるのである。但し、右の3組の用例を見ると群書類従本の「矣」字の用法については、聖藩文庫本の「而」「于」「字」が位置する部分に「矣」字を用いることについては個別の検討が必要であろう。

## 二、『豆相記』の「矣」字の用法

『豆相記』には、先に記したように88例用例が存する。上代には文中にあって「ヲ」格の助詞として用いた例が見られるが、本資料にはそのような例はなく、全て文末に位置し不読としているように見受けられる。それらについて、日本語文として訓読した場合の「矣」字に上接する漢字の品詞について分類すると以下になる。<sup>(8)</sup>なお、訓点によって助動詞が加点されている場合には助動詞に分類している。

動詞＋矣	68例
助動詞＋矣	12例
形容詞＋矣	6例
助辞の重複	2例

まず、「動詞十矣」の用例を掲げる。

○安邊野之役後來從<sub>テ</sub>先帝<sub>ニ</sub>矣

(豆相・一オ10)

○先帝第八宮關<sub>ニ</sub>東<sub>ニ</sub>下<sub>ニ</sub>向<sub>ニ</sub>之時時行<sub>ニ</sub>扈<sub>ニ</sub>從<sub>ニ</sub>矣

(豆相・一ウ1)

○故宮者還<sub>ニ</sub>行<sub>ニ</sub>于吉野<sub>ニ</sub>時行寓<sub>ニ</sub>居<sub>ニ</sub>勢州<sub>ニ</sub>矣

(豆相・一ウ4)

右に掲げたほか、動詞の用例としては、「殺(コロス)」「結(ムスブ)」「呼(サケブ)」等が見られる。

次に、「助動詞十矣」の用例を掲げる。

○故諸士盡<sub>ニ</sub>屬<sub>ニ</sub>上<sub>ニ</sub>杉<sub>ニ</sub>而關東不<sub>レ</sub>動<sub>ニ</sub>干<sub>ニ</sub>戈<sub>ニ</sub>矣

(豆相・二ウ4)

○恰如<sub>ニ</sub>飛龍<sub>ニ</sub>上<sub>ニ</sub>天<sub>ニ</sub>矣

(豆相・四オ7)

○可<sub>レ</sub>謂<sub>ニ</sub>非<sub>ニ</sub>庸童<sub>ニ</sub>矣

(豆相・七ウ4)

助動詞の用例は右の用例の他、「使(シム)」「可(ベシ)」「未(ズ)」が確認出来る。

次に、「形容詞十矣」の用例を掲げる。

○于<sub>レ</sub>茲兩上杉有<sub>レ</sub>間<sub>ニ</sub>昆弟之言<sub>ニ</sub>而不和<sub>ニ</sub>久矣

(豆相・三オ1)

○實當家世々汚管領職<sub>ヲ</sub>執權柄威<sub>ヲ</sub>之間積<sub>ニ</sub>勳漸<sub>ニ</sub>久矣

(豆相・三オ7)

○故三浦師於<sub>レ</sub>彼<sub>ニ</sub>河而宴安甚矣

(豆相・四ウ3)

形容詞の用例は右の用例の他、「莫(ナシ)」「久(ヒサシ)」が確認出来る。

認出来る。

右に掲げた以外に、文末に助辞を重ねて用いる例が見られる。

○非失<sub>レ</sub>血則失<sub>レ</sub>國之言<sub>ニ</sub>乎矣

(豆相・一オ5)

○雖<sub>レ</sub>爭約<sub>ニ</sub>言豈變<sub>ニ</sub>哉矣

(豆相・二オ3)

「矣」字は、「完了・既定をあらわす助辞」であるとされ、観智院本『類聚名義抄』及び世尊寺本『字鏡』において字音を掲出するのみで字訓を掲出しないことから、『豆相記』においてもその具体的な用法を判断することは困難である。しかし、助辞を重ねて用いる例では疑問助辞「乎」「哉」を重ねていることから、日本語の助詞に接続することも確認出来る、その結果、動詞・形容詞・助動詞・助詞と幅広く接続出来る用法を持つことが確認出来るのである。

一方で、平安鎌倉時代に「矣」字と極めて近い用法を持っていた「也」字は、『豆相記』に於いては48例確認出来る、その用法は以下のようである。

名詞十也 32例

助動詞十也 14例

動詞十也 1例

助詞十也 1例

まず、「名詞十也」の用法を掲げる。

○葛山者天智天皇末孫竹下孫八左衛門之後昆也

(豆相・二オ7)

○時人言<sub>ニ</sub>兩管領<sub>ニ</sub>是也

(豆相・三ウ9)

○凡屬<sub>ニ</sub>管領<sub>ニ</sub>一州國相武上野房總羽奥越後信佐等州也

(豆相・三ウ10)

「矣」字の用法としては見られなかった、名詞に接続する用例が、「也」字では最も多く確認出来た。まずはこの点が、『豆相記』に於ける「矣」「也」字の用法差であると言える。

次に、助動詞に接続する用例を掲げる。

○ 屢暢巧<sup>レ</sup>言令<sup>一</sup>色之諛<sup>ハナリ</sup>時<sup>ハナリ</sup>以<sup>ハナリ</sup>浸潤膚<sup>ハナリ</sup>受<sup>ハナリ</sup>之讒<sup>ハナリ</sup>構<sup>ハナリ</sup>二家也

(豆相・三ウ4)

○ 所謂義輝<sup>ナリ</sup>賜<sup>ナリ</sup>輝<sup>ナリ</sup>字<sup>ナリ</sup>也

(豆相・九オ3割書)

○ 葛原親王三代之孫平將軍貞盛之冑裔也

(豆相・一オ3)

「也」字を不読とし、「ナリ」を付訓するためにこの用例が多くなっているのである。右の用例は、何れも訓読語に基づく例であるが、次に掲げるように、用字レベルでの用例も一例ながら指摘できる。

○ 是可忍也孰不可忍也

(豆相・三ウ4)

用例としては2例存するが、右に示したように対句的に用いられているため、併せて掲げた。

次に、「動詞＋也」の用例を掲げる。

○ 於<sup>レ</sup>此越人畏其<sup>ハナリ</sup>強也

(豆相・一三オ8)

最後に、「助詞＋也」の用例を掲げる。

○ 此日何<sup>イッ</sup>日也<sup>ハナリ</sup>天正十八庚寅七月十一日也 (豆相・一七ウ1)

さて、先に「矣」「也」字の用法差として、名詞に接続するか否かを指摘したが、「也」字には「矣」字に見られた、形容詞に接続する用法が存しない。「形容詞＋矣」の用例が6例(「矣」字全体の

割合からすれば、6.9%である)ということから、名詞の場合と比較して、明確に用法差として良いかどうか判断に迷うところであるので、まずは指摘に留める。

一方、「名詞＋矣」の用例が見られないことについては、「矣」が訓と結びついていないために、「名詞＋矣」とすると、訓を補わない限りは文が名詞で止まるためであると考えられるが、なお検討を要するところである。

### 三、真名軍記における「矣」字

『豆相記』における「矣」の用例数及び用法について「也」字との比較を行いつつ、検討を行ってきた。用例数は、「矣」字と「也」字との割合が約2対1となっており、「矣」字の方が多く用いられている。この状況が、中世から近世初期の真名軍記の位置において如何なる意味を有するのか、ということについて検討すべく、他の真名軍記の用例数を以下に掲げる。なお、資料によって総文字数が大きく異なることから、参考までに総文字数を掲げた。一部片仮名を交える『大塔物語』については、片仮名一字についても一字として総文字数に入れている。

【中世真名軍記に於ける「矣」「也」の用例数と総文字数】

	矣	也	総文字数 <sup>⑤</sup>
大塔物語 <sup>①</sup>	1	57	10300
文正記 <sup>②</sup>	4	37	4200
曾我物語 <sup>③</sup>	7	15	80300
惟任退治記 <sup>④</sup>	5	36	5600
豆相記 <sup>⑤</sup>	87	48	6000

右の表から、直ちに看取されるのは、『豆相記』の「矣」字の使用率が、総文字数及び「也」字の数と比較しても極めて大きいと言えることである。まず総文字数が最大の『曾我物語』の約八〇〇〇〇字に対する「矣」字が6例であるのに対して、『豆相記』では約六〇〇〇〇文字に対して、87例とその割合が非常に大きいことが分かる。又、「矣」「也」字の割合を比較すると、先に『豆相記』では約2対1となっていることを記したが、最も用例数が近接している『曾我物語』にあっても約1対2と、その割合が逆転している。そして、『大塔物語』『文正記』『惟任退治記』では「也」字の用例の割合が『曾我物語』よりもそれぞれ高くなっている。比較に用いた真名軍記の「矣」字の用例を、用法毎に以下に掲げる。

まず、「助動詞＋矣」の用例である。本用例が最も多く10例見られた。

- 今鎌倉殿<sup>とて下へり</sup> 日本將軍<sup>の</sup>宣旨<sup>に</sup>矣  
 ○名呼<sup>をはいける</sup> 北條五郎時宗<sup>と</sup>矣  
 (曾我・巻四・一才3)  
 (曾我・巻五・一才3)

- 召具<sup>を</sup>下人<sup>を</sup>許仕<sup>を</sup>御友人<sup>を</sup>入<sup>を</sup> 宇津宮<sup>の</sup>矣  
 ○其次敵<sup>に</sup>助経<sup>に</sup>与<sup>に</sup>大勢<sup>に</sup>烈出<sup>に</sup>矣  
 ○傳兄弟二人意趣<sup>を</sup>聞人々不洩袖<sup>を</sup>無人一人矣<sup>も</sup>  
 (曾我・巻六・一才3)  
 (曾我・巻八・一才3)  
 (曾我・巻十・一才4)

- 成<sup>レ</sup>滯留<sup>ヲ</sup>一御父子相伴<sup>ナ</sup>納御馬<sup>ヲ</sup>給矣  
 ○即時<sup>ニ</sup>乘込<sup>ル</sup>悉<sup>ク</sup>列<sup>レ</sup>首<sup>ヲ</sup>畢矣  
 ○互成<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>入<sup>ル</sup>魂固<sup>メ</sup>取<sup>リ</sup>替誓詞<sup>ヲ</sup>各歸國<sup>ニ</sup>畢矣  
 ○三千佛弟子如<sup>レ</sup>在<sup>ル</sup>目前<sup>ニ</sup>矣  
 ○依<sup>テ</sup>斯科理<sup>ニ</sup>遂失<sup>フ</sup>己身<sup>ヲ</sup>悲矣<sup>カナシキナヤ</sup>  
 (惟任・一七才5)  
 (惟任・一八才2)  
 (惟任・三四才2)  
 (惟任・三八才4)  
 (文正・一四才6)

右の諸例は付訓に基づく接続例であるが、『惟任退治記』三八ウ4の例のみ用字レベルの接続となっている。

- 次に、「動詞＋矣」の用例である。用例数は左に掲げる4例である。
- 肆<sup>マニ</sup>都鄙<sup>ニ</sup>猥雜<sup>ニ</sup>從<sup>テ</sup>是起<sup>リ</sup>矣<sup>コトヘ</sup>  
 ○可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>指寄<sup>ル</sup>雜説<sup>有</sup>其聞<sup>キ</sup>矣<sup>コトヘ</sup>  
 ○走<sup>ハ</sup>而<sup>ニ</sup>于<sup>テ</sup>々<sup>ニ</sup>走應<sup>ニ</sup>手從<sup>テ</sup>心容易<sup>ニ</sup>乘矣<sup>コトヘ</sup>  
 ○御殿<sup>ニ</sup>手自懸<sup>レ</sup>火被<sup>レ</sup>召<sup>ル</sup>御腹<sup>ヲ</sup>畢矣  
 (文正・一才4)  
 (文正・一〇才4)  
 (文正・一二才2)  
 (惟任・一二ウ8)  
 次に「形容詞＋矣」の用例掲げる。本用例は1例存する。
- 往過去<sup>の</sup>約束<sup>の</sup>流来<sup>の</sup>生死<sup>の</sup>有様<sup>ニ</sup>悲思<sup>ヲ</sup>遣矣<sup>コトヘ</sup>  
 (曾我・巻二・一才5)  
 次に「名詞＋矣」の用例掲げる。本用例は1例存する。
- 於<sup>テ</sup>信州<sup>ノ</sup>更科<sup>ノ</sup>郡布施<sup>セ</sup>郷<sup>ニ</sup>合戰<sup>シ</sup>次第事矣  
 (大塔・一才2)  
 最後に「形容動詞＋矣」の用例掲げる。本用例は1例存する。

○打低樋思最後哀<sup>なげ</sup>矣

(曾我・巻九・一才3)

用例数については、先に確認したとおり、『豆相記』に比して少ないことが確認される。用法については、『豆相記』に見えた「動詞＋矣」「助動詞＋矣」「形容詞＋矣」の全てについて、用例数の多少はあるが確認出来た。用法に関しては、大凡のところ『豆相記』と重なると考えて良いであろうが、但し、右の資料に於ける「矣」字の用法には接続以外の偏りが見られる。『曾我物語』では、常に各巻の冒頭で使用されるのである。このことは、僅か一例のみであるが、『大塔物語』でも指摘出来、又『文正記』においても冒頭部で使用されている。軍記物語の冒頭部は由来を語る部分であり、非常に伝統的な内容及び表現を重視する部分である。また、それら全ての「矣」字は他の漢字の大きさと比べると、若干小さく本行の右に寄せて記されることも共通している。その部分に「矣」字が用いられるということは、相当地に正格漢文を意識していることを伺わせるのである。また、このことは『惟任退治記』において、例中<sup>㊦</sup>例が「畢」に接続しており、漢文的な表現とともに用いられることから窺える。

中世真名本に於ける「矣」字と「也」字との用法差については、なお検討を要するところであるが、本稿では『豆相記』の「矣」の用法に焦点をあてて検討するため、中世に於ける「矣」「也」の用法差については稿を改めなければならない。

#### 四、『豆相記』の「矣」字使用の背後

これまで、『豆相記』の「矣」字について、中世真名本と比較しつつ、その用法について検討してきた。接続については、他の真名本と大きく異なる部分はないが、用例数が大きく異なる点の違いとして指摘出来る。又、他の真名本では漢文であることを強く意識させる部分に「矣」字が見られるのであるが、『豆相記』にあつては文章中ほぼ全編に亘って用例が指摘出来る。

また、訓読の立場からすれば、その用法は日本語として何らかの訓を有しているようには見受けられず、多くの場合不読としている。一方で、『豆相記』の「也」字は、仮名点によって「ナリ」と結びつくなどが見られ、訓との結びつきを伺わせる。他の真名本で極めて形式的に用いられている「矣」字が、『豆相記』において多用される理由については、具体的な日本語と結びついているというものはなく、文章表記上「矣」を以て文末を表示するという、句点的な機能を有しているのではないかと考える<sup>㊧</sup>。

漢字文に於いて特定の漢字が句点的な機能を有するということは、矢田氏が先に指摘されており、「候」字の機能について次のように説明する<sup>㊨</sup>。

その候文の視覚的な読みやすさを支えたものには様々あるだろうが、文末及び句の接続に必ず「候」が存在することは意味の

切れ目の確認手段として有効に機能するものである。

漢文を訓読する際に、どの部分で区切るか、ということは古来日本人にとって大きな問題であった。日本語の文末が文法的に終止形や終助詞によって表示されることは対照的に、漢文では文末に置かれる漢字が存するものの、常に文末の漢字を用いるとは限らないからである。そこで、日本人は仮名文には区切れの符号を用いない一方で、漢文訓読において句読点を用い始めたことは、周知の事実である。更に、問題となるのは、日本人が漢字文を表記するときに文の区切れをどのように表示するのか、ということである。

候文では、「候」字が句読点的機能を有していると矢田氏は指摘するが、近世初期までの真名軍記の場合「候」字が使用されることは少なく、文末を表示することが出来るのは所謂文末の助字だけとなる。そこで、どのような文末の助字を用いるかが問題となるが、疑問や断定の場合には「乎」や「也」が日本語としての疑問の助詞「か」や「なり」と対応しているので用いやすい。ところが、助動詞を伴わない文となると書記をする立場としては文末を表示することが出来ない。そこで、『豆相記』の場合「矣」字が用いられたのではないかと、先づき、先の「乎矣」「哉矣」という文字列も単純に疑問をあらわすのみと解釈出来るのである。

## 五、まとめ

『豆相記』とほぼ同時代成立と見られる『惟任退治記』では、文末を示す助辞が記されない。一方で、『豆相記』では、「也」「矣」によって文末を積極的に示そうとすることが判明した。文末を示すことは、日本語文としての切れ目を表示することに外ならないが、文意を理解する上では文が中止しているか継続しているかは問題とはならない。変体漢文は、本来の日本語の表記形式を捨て内容の理解が可能であるというところで成立しているのであり、本来は『惟任退治記』のような表記法で充分その役割を果たしているのであるが、日本語文として理解されようとする配慮が働くとして、『豆相記』のように文の切れ目を表示する必要性に迫られるのではないかと。ただし、『豆相記』にあってなぜこのような特殊な「矣」字の用法を有するのかについては、一つの解釈を示すに留める。

さて、ここまでで『豆相記』の「矣」字が、他資料と比較して非常に特徴的な用法であることを指摘した。問題は、何故そのような特徴が生じるのか、ということである。このことについては、より広く資料を検討して行かなければならないが、資料的な性格に基づく解釈の可能性について、言及したい。

近世に入って、各地で所領の大名についての由来記が作成された。そしてその分布範囲は、全国的な広がりを見せる。それらの成立に

つては、梶原正昭氏によって詳述されており、また『平家物語』や『太平記』などの初期軍記の影響が指摘されている。<sup>②③</sup>しかし、『豆相記』の如き関東での合戦の詳細な記述は、ある程度の土着性が存在しないことには成立し得ない。

土着性ということについては、例えば丹波赤井氏に関係する軍記について、山上登志美氏は、次のように述べる。<sup>②④</sup>

今回とりあげた赤井氏関係軍記の祖本の作者は、黒井周辺に生きた人物であろうし、それぞれの伝本に見た改変も地元が生きた人々によってなされたものである。(中略)

題材となった地方の合戦の地元には生きた人が書いた軍記が、地元において改変され、地元で根付き伝えられていく。軍記の誕生から改変、享受まで地元と密接に関わるこのような性質は、前代の軍記作品にはほとんど見られないだろう。

また、『別所記』についても、

『別所記』には、このような地元の人々の強い思い入れや、在地でしか知り得ない情報によって加筆されていた痕跡がうかがえる。かえって、早くに地元から外に流出した伝本の方に古態性がうかがえるのである。

として、諸本を「在郷性」という観点から分類している。<sup>②⑤</sup>

近世初期軍記を「在郷性」や地域性・地方性という枠組みで捉えると、助字の用法の偏りは単に用法上の問題だけに止まらない。そ

こに住まう人々が如何に軍記物語を生成し、享受したのかということも含めて考えなければならない。一方で、文書なども全国各地で作成され、その分布は広範囲に亘り、またその点数は非常に多い。その文章の体裁については候体の確立など部分的な歴史的变化は認められようが、大凡定型化していると考えられ、地域による大きな差は考え難い。

『豆相記』の助字「矣」字の用法と、資料的な性質とをどのように結びつけられるか、又数多く存在する近世初期軍記の資料群について「用字法」と「地域性」という二つの視点を設定すると、どのような事柄が垣間見えるのか、ということは今後の課題としたい。

注

- (1) 『群書解題』第十三、「豆相記」の項目による。なお、本稿で用いる本文は、聖澤文庫蔵本の紙焼き写真による。
- (2) 『群書解題』第十三、「豆相記」の項目による。
- (3) 鈴木直治『中国古代語法の研究』(汲古書院、一九九四年) 一六五頁等。
- (4) 『説文解字注』(上海古籍出版、一九八一年) 二二七頁下に、「語已詞也」とあり、これによったものか。
- (5) 鈴木恵「日本靈異記古写本の比較に基づく文末の助字「也」「矣」字の用法」(『鎌倉時代語研究』第三輯、広島大学文学部国語学研究室、一九八〇年)。上代の文献については、李登瑩「上代漢字文献における「矣」の用法」(『国文論叢』第四二号、二〇一〇年)に詳しい。
- (6) 「成立事情の違い」というのは、築島裕氏「平安時代の漢文訓読語につ



きての研究』（東京大学出版会、一九六三年、九二四頁）において指摘されている。漢文の分類（第一義の変体漢文と第二義の変体漢文）を指す。平安鎌倉時代の変体漢文は、多くの場合第一義の変体漢文として良いが、中世以降成立の漢字文は第二義の変体漢文であることが疑われるのである。

- (7) 群書類従本については、『群書類従・第二十一輯 合戦部』（一九九四年、訂正三版第九刷）を参照した。所在には頁数・上下段・行数の順に記している。

- (8) 「為」字はタリ・ス・ナル等の訓を持ち、動詞・助動詞の判別が困難であるため、全て動詞とした。「為」字に接続する用例は3例である。

- (9) 小川環・西田太一郎『漢文入門』岩波書店、一九五七年、三四頁他。また、『大漢和辞典』では、以下のように説明している。用例は省略する。

【矣】一 語の終りに用ひる文字。

イ 断定・決定などの意をあらはす。

ロ 限定の意をあらはす。

ハ 疑問、又、反語の意をあらはす。

二 句中、又は他の助辞に冠して詠嘆の意をあらはす辞。

三 句末にあつて下を起すに用ひる辞。

『豆相記』にあつては全て文末の用例であるので、一或いは三の用法に該当するものとする。但し、後に指摘するように形式的に文末に用いられているので、『豆相記』のそれは何れにも該当しない用法であるとする。

- (10) 総文字数は、それぞれ一〇の位で四捨五入をした。

- (11) 文正元（一四六六）年本奥書、嘉永四（一八五一）年刻。

- (12) 文亀二（一五〇二）年本奥書、寛文三（一六六三）年写。本文は松平公益会所蔵本の紙焼き写真に依った。

- (13) 天文一五（一五四六）年写。本文は、『真名本曾我物語』（勉誠社、

一九七四年）に依った。

- (14) 天正一〇（一五八二）年成立、江戸中期写。本文は内閣文庫蔵（一六・二五・二二号）本の紙焼き写真に依った。

- (15) 戦国から江戸初期成立、群書類従本による。

- (16) 『豆相記』には文の句切れを示す句読点などの補助符号は使用されておらず、また文字間による文末、句末の表示方法も採っていない。そこで、「矣」字による文末表示をしているものとするが、では他の真名本ではどのように文末を表示しているのか、という問題については課題として残されている。今後検討したい。

- (17) 矢田勉『国語文字・表記史の研究』（汲古書院、二〇一二年）第四編第三章 候文の特質 I —「候」字の機能

- (18) 「矣」字の機能を、以上のように理解した場合、他の漢字文での句切れが問題となるが、このことについては個別の検討が必要となろう。例えば、『御堂関白記』などの古記録は一つの記事が比較的短く、内容の把握には長文と比較すると労力を必要としない。又、改行によって文のある程度の句切れを表示することが出来るという事情がある。

- (19) 梶原正昭『室町・戦国軍記の展望』（和泉書院、一九九九年）所収「戦国軍記の展望」等。

- (20) 武田昌憲『大友記』と『太平記』 — 『太平記』の影響 —（『茨城女子短期大学紀要』20、北川忠彦『戦国軍記「清良記」にみる『平家物語』『太平記』の受容』（『女子大國文』115）等。

- (21) 山上登志美『丹波赤井氏関係軍記について — 戦国軍記の地方性 —』（『軍記と語り物』42、二〇〇六年）

- (22) 松林靖明・山上登志美『別所記 — 研究と資料 —』（和泉書院、一九九六年）

— はしむら・かつあき、広島文教女子大学教授 —